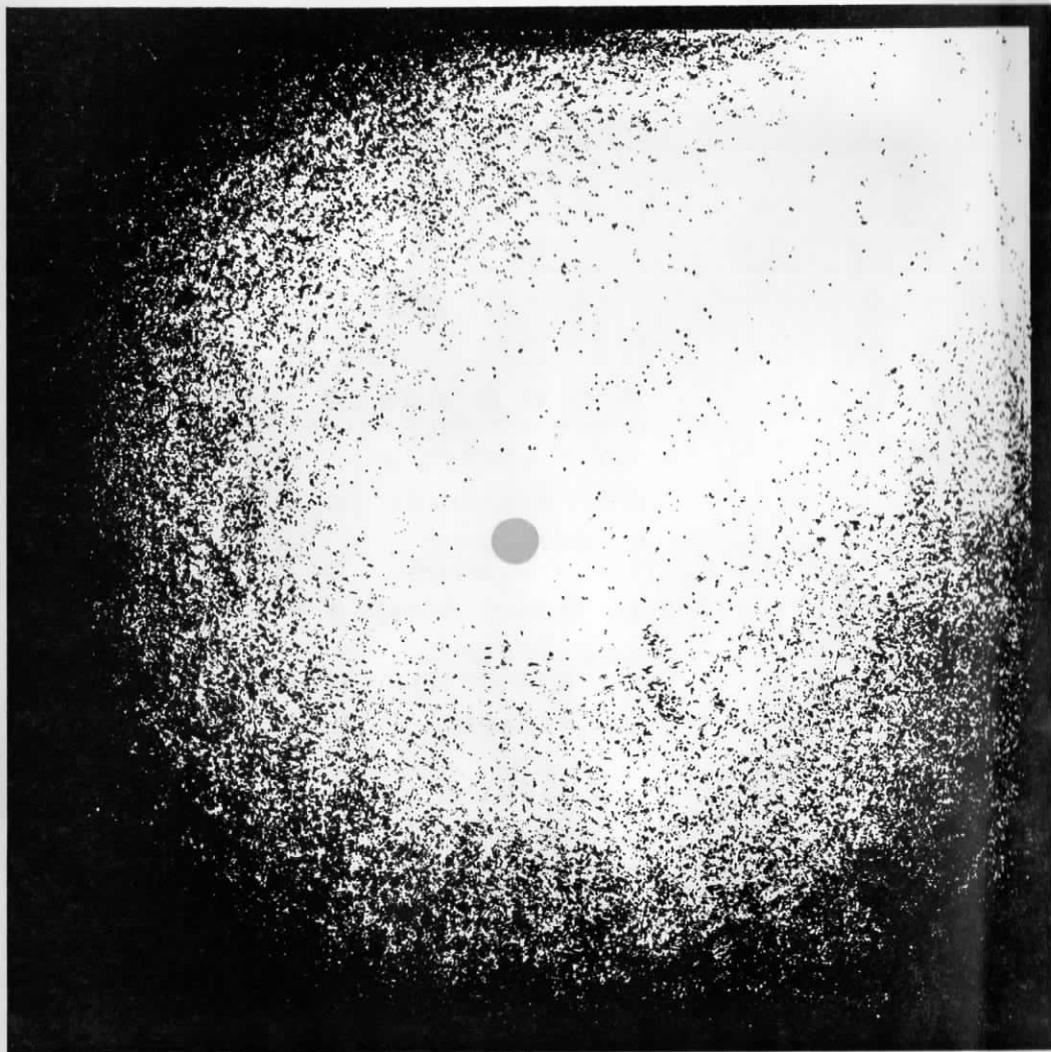


72/11
黒の手帖
14

黒
の
手
帖



一九七三年十一月



定価 250円

黒の手帖 第14号目次 1972年11月

人間における遊戯と労働 (4)	大 沢 正 道	1
恋愛のアナ・ボル論争 (1)	秋 山 清	11
金子光晴にみる状況と 詩的真実	暮 尾 淳	18
書評 困難な地平への単独行	蓮 台 寺 晋	24
大杉栄の革命理論に 関する私論 (下)	諸 伏 恒	29
ブルードンの弁証法	G.ギュルヴィッチ 長 谷 川 進 訳	54
スペイン革命に おけるCNT (13)	ホセ・ペイラツ 今 村 五 月 訳	68
編 集 後 記		

表紙 高 木 昭

人間における遊戯と労働 (4)

大 沢 正 道

2 未開社会の労働観念 (つづき)

前回、典型的な採集狩猟民族であるブッシュマン、エスキモー、なかば採集狩猟民族であり、なかば農耕民族であるナンビクワラ、そして最後に農耕民族になりきったトロブリアンド島人の経済生活を つうじて、それぞれの労働観念をさぐってみた。そこから引きだされた結論の一つは次のようなものであった。

「これまでに述べてきたことが示しているように、一口に未開社会といっても、採集狩猟社会と農耕社会とは、その労働観念はかなり質的に相違している。そこには共通する部分もあるが、それ以上に異質の部分があり、この異質の部分が、次の文明社会との共通部分となり、同時に文明社会独特の部分が作りだされていく、そのたびごとに、人間は、生理の自動性のような動物性を失い、人間個体の自家調節作用をなくしていく、そのかぎりでは、人間の歴史は退化の歴史であるとしても、かならずしも奇言ではなからう。」

退化史観の問題はさておいて、今回は順序としては、文明社会における労働観念の究明に取りかかるべきところであろう。もともと農耕社会は、未開社会と文明社会の二つのカテゴリーにわたっており、その次に工業社会が位置しているのだから、文明社会段階での農耕社会を取りあげなくてはならぬわけだが、今回はすこし足踏みして、未開社会段階における農耕社会の労働観念について、データをもうすこし集めておきたい。というのは、これはまだ一つの予感的な仮説にすぎないが、現代の労働観念(資本主義体制、「社会主義」体制を問わず)の原型は、農耕社会のうちにその主要な部分が見出されるようにおもわれるからである。

まず、H・L・モルガンの研究で名高い北アメリカのイロコイ族からみていこう。資料は主としてB・H・クワインの調査によった。(B. H. Quain, "The Iroquois" in *Cooperative & Communist among Primitive Peoples*, edited by M. Mead, 1937, revised edition 1961.)

e イロコイ族

イロコイ族は五大湖地方に住むアメリカ・インディアンの一民族で、トウモロコシの焼畑耕作を行なっている。彼らは柵で囲まれた村落を作り、巨大な長屋を建てて生活している。この長屋はイロコイ族の政治的象徴といわれるもので、長さは五〇フィートから一三〇フィートあり、入口は両端に一つづしかない。いわばトンネルのような形である。なかには一二か一三のかまどがあり、これらのかまどを囲んで二〜四組の家族が暮らしている。そして、ここに住む有力な家族の属する氏族の名前がつけられ、標識をかかげている。村落は大体、三、四百人の人口を有するが、焼畑耕作をしている関係で、地力が衰えればその土地を捨てて、村全体が新しい土地に移動しなくてはならない。移動の周期は、大体、一〇〜一二年といわれている。フェントンは、その際の家作りについて、次のように述べている。

「家は共同作業で建てられた。ある家族が助けを必要としているのを知った歌唱結社 *singing society*、男の友人たち、それから一群のよそものといった連中が家を建てるために寄合いを組織する。樹皮は男によつてはがれ、女は木の外皮をたばねるを手伝ったり、嬉々として働く労働者のために食事を用意したりするよつだ。」

ここにある歌唱結社と仮に訳しておいた集団はなにを意味するのかよくわからないが、家を建てるに際して行なわれる宗教儀礼、さしずめ地鎮祭のような儀礼を司るシャーマンであろうか。まさか労働歌の専門集団ではないだろう。

いずれにしても、家作りはそのまま村作りでもあるわけで、近隣

の若者はすべて動員される。そして、それはまた収穫の祭りとおなじように、饗宴と社会的な交流の機会でもあるのだ。

これからもうかがわれるように、家作り、村作りのために行なわれる共同労働は、たんにある家族が独力で家を建てることのできぬから、近隣の力を借りるという技術的な必要以上の意味をもっている。いわばそれを契機として、共同して働くことの喜びを味合ううとしているのである。

共同労働と共同労働をつうじての社会的欲求の充足は、イロコイ族の主要な仕事である農業においてさらに顕著にみられる。

家作り、村作りと並んで重要なのは畠作りである。イロコイ族の住む地方は地味も肥え、水も豊かだから、かならずしも共同労働は必要ないのだが、焼畑のような作業の場合、大多数の人々がこれに参加するのは、仕事が渉るため以上のもの、つまり共同することで集団作業のもたらす喜びが経験されるからである。

焼畑の第一歩は、めざす土地に生えている大木の皮を丸く切り、幹をぐるぐる巻きにして、樹液の流れを止める仕事である。一年たつと、木は枯れてしまう。そこで幹の根元にたきぎを積んで火をつけ、こなごなに砕けるまで十分に焼きつくす。炭化した木を砕くのに使うのは粗末な石斧で、この作業は長時間かかり、根気がいる。火をつけたり、木を砕いたりするのは男の仕事で、女はバケツに水を汲んできて、木の先の方を濡らす。そうすると木が蒸までよく焼けるのだ。

このように、経済生活の基礎となるような大仕事の場合は男女が共同して働くが、日常的な播種、植付、収穫の仕事は女の分担となっている。女はこのほか、育児、家事万般を受けもっており、かな

り忙しい。その間、男は狩猟や戦争や部族間の政治に従事している。もつとも、イロコイ族にとって狩猟は経済活動というよりも、一種のリクリエーションであり、ゲームなのである。狩猟のスポーツ化は、すでにこの未開社会にみられるわけだ。

イロコイ族の農耕の様子について、一六一五年に同地を訪れたサムエル・ド・シャンプランの報告がある。それを次に引用しよう。「……彼らは土地を開墾し、耕作するが、それはこれまでわれわれがみたことのないようなやり方である。すきの代わりに彼らはシャベルのような形の堅い木の道具を使う。……一カ所に三、四個の種を蒔いてから、彼らはまえにあげたシノックの殻でいくらかの土を盛る。それから三フィートほど離れて同じように種を蒔き、それを繰り返す。……」

また、イロコイ族の一人コーンプランター（トウモロコシ蒔きともいう意味か）は、耕作の様子を次のように語っている。「種蒔きのような畠仕事で互いに助け合うことはセネカ部族（イロコイ族を構成する部族の一つ）の場合、慣習以上のもの、『寄合い』とわれわれが呼んでいるものにずっと近い。ある老婦人がリーダーに選ばれる。だがクランやフライトリーはここでは問題にならない。村中の女が参加する。彼女たちは一緒に働き、同時に自分たちも楽しむのだ。ある女の畠の仕事を終えると、次へ移り、こうして一日であらかた片付けてしまう。彼女たちは手弁当でやるのだ。……トウモロコシの皮むき仕事もまったく同じやり方で行なわれる。」

女たちは、村中の女から成る相互扶助結社と呼ばれる別の組織をこしらえており、もしある女が病気で働けない場合でも、彼女の畠

は他の女の畠とわけへだてなく面倒をみられ、彼女の分の収穫は当然のように彼女に与えられる。収穫期は、イロコイ族の経済生活でもっとも活気に溢れた時である。女たちは大体四つのグループに分かれる。第一のグループはトウモロコシを茎からもいでかごに入れる。第二のグループはかごに入ったトウモロコシを村へ運ぶ運搬係、第三は饗宴の準備に忙しく、第四のグループはトウモロコシを束にして、長屋のたきぎにするしていく、これは一種の分業であり、流れ作業だが、A・C・パーカーはこの仕事がなされる際のにぎやかな状態を強調している。おしゃべりをしながらの労働の伝統はまだ生きている！

そして夕暮とともににはじまる饗宴——それはたんに一日の労働の骨折りをねぎらう場面にとどまらない。全員が社会的交流を遂げる機会、歌ったり、踊ったり、愛を交わしたりする機会なのである。

イロコイ族には土地私有の観念はない。コーンプランターのいうところによれば、「土地の所有については、全部共有だった。ある地面に標識を立てるものはだれもいなかった。偉大な精神 *Great Spirit* が、彼ら自身を使い、楽しむために土地を与えたのだと信じていた。それゆえ、銘々自分の持分に種を蒔いた……」のである。このように、土地はすべて共有だけれども、個々の家族と氏族と部族がそれを使用する権利ははっきりしていた。幸い土地はあり余るほど広かったので、所有する者と所有しない者とはっきり区別する必要がなかったのだ。

食糧経済の全局面で所有権が確立されているとみられるのは分配にだけである。つまり収穫物は共有でなく、それぞれの家族、氏族、部族の所有になるのだが、それが私的所有の弊害を生ま

ない制御装置として、気前のよきともてなしという二つの掟があった。食物を気前よく振舞うことは名譽な行爲であり、そのことは家族の名譽として長く伝えられたのである。

この場合の分配はむしろ、贈与の範疇に属するものであろうが、この大盤振舞いともてなしを経済原則に取り入れることによって、イロコイ族の社会生活の平等性は保持され、また同時にそれが社会保障の役割を果たしているわけなのである。

さて、晩秋に取り入れが終わると、植物を成育させる超自然力が眠り込む時期——冬になると、イロコイ族の村落は高齢の年寄と小さな子供を除いて空っぽになる。およそ働ける者は小さな集団を組んで狩猟の旅に出ていくのだ。これはおそらく採集狩猟社会の名残りでもあろうか。約三カ月の遊動生活を了えて、二月末にはまた村へもどり、ドリーム・フェスティバルの準備にかかる。ドリーム・フェスティバルとは年に一度の大祭で、この時、秩序立った日常生活の下にうっせきされた抑圧が、一時に放出されるのである。

f バトンガ族

イロコイ族は、冬期の遊動生活にみられるように、採集狩猟社会の残映をとどめている。もともと、彼らの半定住生活は、その農業が焼畑耕作を基礎としていることも関係があろう。焼畑はきわめて原始的な農法だとされているが、地方が衰えればその土地を棄てて、新しい土地へ移動するのが原則であるから、定住しようもないわけである。

それはまた同時に、政治的には流動的な連合体制を生みだしている。人口が一箇所に定着し、集中するのではなく、たえず流動し、

分散する傾向にあるので、集権化された政治体制は成立しにくい

し、またそれが生みだす社会文化が、集権的な政治体制を拒否しがちなのである。これがモルガンやエンゲルスをして感歎させたイロコイ族の政治体制——その部族連合を成り立たせた経済的基盤なのだが、E・R・ウルフによれば、これは焼畑方式を取る農民一般の傾向だという(佐藤・黒田訳「農民」鹿島出版会)。深作光貞が紹介しているカンボジャのクメール族の社会にみられる反文明、反国家の傾向も、ほぼおなじ経済的基盤を有しているようである(『反文明の世界』三一書房)。

ところが、農耕が焼畑のような長期休閒方式から永久耕作に変わっていくにつれて、その経済、政治、文化もまた変わってくる。その推移を南アフリカの東海岸に住むバントゥー人に属するバトンガ族と、ルソン島北部の内陸部で水田耕作を営むイフガオ族についてみることにしたい。

まずバトンガ族から。資料はおもに Irving Goldman, "The Bathonga of South Africa" in *op. cit.* 247-72。

バトンガ族の社会構造は、これまでにみえてきた未開社会の諸民族に比べていちじるしく異なっている。これまでの諸民族はほとんどが母系制であり、女の社会的地位はいずれもかなり高かった。それはイロコイ族の場合もそうで、クワインは、その母系制や女の社会的地位の高さを、女が経済生活の実権を握っている点から説明している。

ところが、バトンガ族の場合、その社会は完全に男の社会である。女は男に全く従属しているといつてよい。早婚と育児、それに加えて傭や家での労働の大半が、バトンガ族の女に課せられた仕事

である。それどころか、場合によっては、牛を手に入れる代償として売買されることさえある。一方、男の方は大勢の親族や妻を擁し、一杯つまった倉庫をもち、一年のうちまるまる九カ月は、狩猟に興じたり、酒を飲んだり、おしゃべりをしたり、隣村の知合いを訪ねたりして過すという具合である。

もともと、すべての男がこの特権を享受しているわけではない。というのは、男は女を従属させると同時に、父親あるいは家長として、子供や一族のものを服従させているからだ。さらに年下の者は年上の者に服従する義務が課せられている。それはまさに家父長制社会、権威主義社会そのものである。

このことは未開社会にも、すでに文明社会にみられるような構造の社会が存在していることを物語っている。というよりもむしろ、バトンガ族の社会は、未開社会が文明社会に移行していく過渡期社会の一例であるのかもしれない。

女のもつ経済生活の比重の大ききから、母系制の成立や、社会的地位の高さを説明するのは、あなたが前記のクワインばかりではないのだが、バトンガ族のケースを調べていくと、この説明では十分につくされぬように考えられる。なぜなら、バトンガ族の場合も、その経済生活の主要な部分になっっているのは他の未開諸民族と同じく、女なのだが、にもかかわらず、その社会的地位はまるで異なっているのである。そこにはなにか別の要因が働いているとみなくてはなるまい。そのことを追求するまえに、まずバトンガ族の経済生活の実態を明らかにしておく。

バトンガ族の経済生活の基礎は農業と家畜の飼育にあるが、後者は少年や若者の仕事であり、前者はおもに女の仕事とされている。

そのほかに狩猟と漁撈がある。狩猟は男の仕事だが、ソウヤカバをはじめほとんどの獲物は、狩猟を職業としている世襲制の専門集団によってとらえられている。そのほか、職人の専門集団として、かごやつば、鉄製品を作る職人の集団がある。つまり、特定の技術の専門化、世襲化が進んでおり、それに伴って分業化がみられるのである。

バトンガ族の耕作法はイロコイ族のような焼畑耕作ではなく、いわゆる永久耕作といつてよい。七月にはいり、ピンクや白の百合の花が園中に咲き乱れるようになると、女たちはくわの手入れをし、新しい畠の整地や湿地の開墾の準備にかかる。百合の花が冬の去ったことを告げる標識なのである。新しい畠の整地は非常に苦しい労働で、女たちは斧で小さな木々を切り倒し、くわで土地を整えなくてはならない。

畠作りのような力のある大仕事には、イロコイ族の場合のように、男がむしろ主体になる例が多いのだが、バトンガ族の男は協力しない。幸い、前年に多くの畠が整地されている時には、女たちは湿地の開墾にはげむのである。これらの労働が八月、九月、十月とつづく。

もともと九月に入って雨が降り始めると、恒例の種蒔きが行なわれる。種蒔きの場合、注目すべきことが三つある。

第一は、この種蒔きは雨があがらないうちに終えなくてはならぬところから、大急ぎでやらなくてはならぬことだ。彼らの労働の様子を、アンリ・A・ジュノーは『南アフリカ部族の生活』で次のように活写している。

「五十人ほどの黒い肉体がさしちようばえのように、一生懸命働

いているさまがみえよう。……各人がたがいにもつと頑張れとはげまし合い、大急ぎで仕事を終えようとしている。」

ここには、おなじアフリカ大陸でありながら、労働を楽しく、おしゃべりしながらのんびりやり、やりたくなくなったらやめて翌日にのぼすといったブッシュマンにみられるような観念はない。雨があがらないうちに、種を蒔き終わらないと芽が出ないかもしれない、という必要に迫られてのことであろうが、ブッシュマンのような採集狩猟民族の場合は、かりにそういう必要に迫られても、その必要に全面的に服するのではなく、そのきびしさのなかでも、なおかつそのきびしさが要求する労働の苦痛をなんらかの形で緩和する試みがみられる。それが労働を楽しく、愉快にする試みであり、また共同労働の試みでもある。労働を美しくする試みも、その一環といつてよいだろう。

ところが、バトンガ族の場合には、こうした試みへの志向は薄弱である。むしろ、たがいに「頑張れ、頑張れ」とかけ声をかけ合つて、労働の能率を促進しようとする。それはいつてみれば、文明社会に固有の経済的優先型の労働にほかならない。

やはり能率を促進する必要に迫られてのことだが、仕事量が自分たちの手に負えないとおもわれる場合、女は隣人に応援を求め、これが第二の点だ。もともと、これは未開社会では珍しくない招聘労働の一種であり、応援を求められた隣人は喜んでそれに応ずる。大ジョッキの酒が振舞われるだけでなく、自分が困った時には彼女の助けを借りなくてはならぬことを知っているからである。それはたしかに相互扶助の意識にほかならないが、イロコイ族にみられるような村をあげての共同労働や相互扶助結社のような組織はない。

どあるので、分配するのに事欠かないし、それによって彼の租税収入は劣せずしてふえ、また臣従を誓った居住者を戦争の時には兵士として使え、平時でも必要に応じて労役を課すことができるからだ。

このようにして分けられた土地は、分配を受けた居住者のものとなり、代々相続はできるが、売買は決してできない。バトンガ族の社会では女や牛は売買されるが、土地は売買されないのである。また一般に、土地は居住した一族の家長に与えられるが、それは彼が耕作する面積をずっと上廻っているので、家長はその一部を一族のものに分ける。結婚した男や女が銘々の畠をもつのは、そういうわけなのである。

彼らは銘々自分の畠をもっているだけでなく、自分の穀物倉ももっている。これはトロブリアンド島人の場合に似ている。トロブリアンド島人もまた、大小さまざまなヤム芋の小屋をもち、その豊かさを誇示していた。バトンガ族もまた、「できるかぎり」自分の穀物倉に、その年の収穫を積み込む。ただし、男が働くのはそこまでで、脱穀などは女の仕事とされている。収穫が終わると、お定まりの祭が始まり、酒盛りや友人同士、親族同士の交際が行なわれる。

バトンガ族の経済生活のもう一つの柱が家畜の飼育であることは、すでに述べたとおりである。家畜の飼育と、バトンガ族にみられる労働の観念の変化とは、おそらく関連がある。家畜の種類は牛、ヤギ、家禽などで、牛は花嫁を買うのに必要な財産としてとくに重要視され、村の若者が飼育にあたっている。牛を所有するのは家長だけだが、ヤギは事実上だれでも飼っており、牛番よりもっと小さな子供の仕事とされている。彼らはその代わり、ヤギの乳を

第三は、種蒔きにまつわる儀礼であり、それはこの社会の身分秩序を物語っている。バトンガ族が最も古くから知っており、かつ主要な農作物でもある穀物に、ミリットと呼ばれるもうこしの一種がある。このミリットから、彼らの愛好する酒が醸造されるのだが、その種を蒔く際には、アリ除けの魔力をもつと信じられている根の汁を塗らなくてはならない。この根は酋長の一族だけがもっており、酋長の畑にミリットが蒔かれたあとで、副酋長たちに廻される。副酋長たちは、一定量の種に根の汁を塗り、それを村人たちに配る。村人たちはこの神聖な種を普通の種にませて蒔くのである。したがって、村人たちは、酋長や副酋長たちが蒔き終わるまでは、ミリットの種を蒔けないことになる。これがあるいは、彼女らが種蒔きを急がざるをえぬことと関係しているのかもしれない。

作物が成長し、実りはじめると、女や子供が昼も夜も畠の真中に

すわり、ブリキのかんとかその他の「楽器」でけたたましい音をたてる。これは鳥の群から作物を守るためのだが、ずいぶん味気ない労働である。ともかく、鳥が来ようが来まいが、持場を離れることはできないのだから。かかしや鳴子はこの労働の代役として発達したものであろう。

収穫期は、バトンガ族にとってもいちばん活気に溢れた時期である。この時には男もできて、自分の畠の取り入れをする。彼らは男も女もそれぞれ自分の畠をもっているのだ。もともと、自分の畠といつても、土地はすべて酋長に属するとみなされている。居住者はみな酋長に臣従の誓いをし、租税の支払いを約束して、酋長から土地を分けてもらうのである。

酋長は居住者のふえるのを歓迎する。なぜなら土地はあり余るほもらうのだ。大人はヤギの乳は飲まない。家禽はいちばん普通の家畜で、いけにえに使われたり、食用にあてられたりしている。

人間と動物とのつき合いは、人間の歴史とともに古い。ブッシュマンにも飼犬がみられる。人間が動物を、人間の目的のために飼育するようになった主たる動機は、一つは食糧の安定した確保にある。すでに繰り返し述べてきたとおり、狩猟は労多くして功少ない、経済的には採算の取りにくい労働である。食用できる動物を常時確保できたら、食生活の安定性はかなりたかまるであろう。

しかし、それだけではない。もう一つ、労働の代行がある。労働が本質的に苦痛で、困難なものであることは、これまでの記述からもほぼ明らかといつてよい。それだからこそ、労働を楽しく、愉快にする試みが企てられるのである。だが、労働の痛苦を逃れるには、もう一つの方向がある。それは、苦しい労働を自分以外のだれかに肩代わりさせるやり方である。家畜の飼育はその方向への第一歩で、それに味をしめた人間は、おそらく人間を人間の道具にすることを発見したのであろう。奴隷の誕生である。これには道具の発達も関連しているにちがいない。

バトンガ族には奴隷労働はみられぬようである。もともと、一八一五年から三〇年にかけて、彼らの大半は好戦的なズール族のために奴隷化されたというから、奴隷の体験はあったといえよう。だが、この時の体験から、女子供を奴隷的地位に引きさげようになつたわけではあるまい。深作光貞の報告によれば、シャム族によつて何回となく奴隷化されたクメール族は、都市中心国家の建設を断念し、「分散四散してジャングルを開拓し、そのなかに閉鎖的な小農村をつくつた」『反文明の世界』という。その場合、彼らのなか

に女子供の奴隷化はみられない。むしろ女の社会的地位は高いのである。バトンガ族の家長長制、身分制は、永久耕作による人口の定着と集中、生産物の蓄積が生み出す富貴の格差、家畜の飼育、道具の使用に伴う労働代行の観念の発達等々の要因によって一層よく説明できよう。

まえにも触れたとおり、狩猟の大半は専門の猟師たちによって行なわれる。彼らはフィサと呼ばれる特殊な階級を作り、独自のまじないと独自の暮らしをしている。ジュノーによれば、「とくにカバの狩人によくみられるのだが、彼らは時々、特定の村落に住み、多少とも呪術師の資質を帯びている」という。

危険な野獣を追跡し、仕止める技術のほかに、最も大事な条件として呪力がある。たとえば、カバ狩りに行く前に狩人は娘を呼んで彼女と交わる。また体にクスリを塗り、数々のタブーを守る。そのほかいろいろなききたりがあるが、重要なことは、これらのなききたりが秘法として代々世襲されていく点である。それによって彼らは自らを専門の閉鎖集団として確立していくわけだ。

ゾウやカバが殺されても、酋長の使いが来るまでは死体に触れることはできない。酋長の使いは、呪力をもっていると信じられていてる部分を取り除くのだ。それから獲物は村へ運ばれるが、その時は狩人だけでなく、村にいる男が動員される。最初に槍を投げた者が行なう儀礼のあとで、肉はすべての村人に分けられるが、酋長のためかなりの部分が残されている。また、主役の狩人たちは儀礼として最初の肉を食べることになっている。

これらの仕事にはどれにも一つ一つ呪術的な儀礼がともなわれている。たとえば、最初に槍を投げた者が行なうルルラと呼ばれる

これらの様相を、実例をつうじて以下にみてみよう。資料はやはりバトンガ族のレポートを書いたI・ゴールドマンの“The *Huangao of the Philippine Islands*” in *op. cit.* に主としてよった。

イフガオ族が住むルソン島北部の山地は、フィリピンでも最も孤立した地方の一つで、聳え立つ山と岩だらけの丘陵、こんもりした密林が外部との交流をむざくしている。さらに山の麓に小さくかたまっている村落(普通、六―二軒ぐらい)同士の行き来もあまりない。というのは、山が高く、谷が深いので往来が大変だからである。村落はほとんどが血族関係より成っており、同じ部族同士の往来もあまりない。地理的な環境に強いられたとはいえ、この孤立は未開社会では珍しい。バトンガ族にとって、近隣の村人との交流は、大事な楽しみとなっていた。イフガオ族が同じ谷に住む仲間とは平和に暮らしているのに、遠くの隣人とはしばしば流血の紛争をおこすのは、この強いられた孤立と関係がありそうだ。

ところでイフガオ族の経済生活の特徴づけるのは山腹に作られた段丘式の水田である。それは彼らの苦心の作であり、したがってまた、彼らにとってなによりも貴重な財産なのだ。

この段丘式の水田作りは男の仕事である。彼らは二〇フィートの高さまで石と土を積み上げ、一一フィートほどの幅の段丘をこしらえる。それから段丘に浅いみぞをうがち、沢山の粘土を流す。それが水もれを防ぐ底土になるのである。同じようにして表土が盛られる。この仕事は普通、それぞれの家族の男が繰出で行なうが、金持の家族の場合にかぎってよそものが雇われる。

一方、稲の植付けや手入れは女の仕事である。植付けから取入れまでの九カ月の労働は、熱帯の太陽のもとでは、かなり骨の折れる

儀礼では、カバは仰向けにころがされ、彼は後脚の間からはい上り、胸をカバの腹にすりつける。こうしてカバの臭いをしみこませるのだ。そうすれば今度カバにあった時、カバは彼を仲間とおもっだろうと信じられている。

こうした想像力の発達に伴う複雑な呪術的儀礼が、労働の専門化、分業化に二役も買っていることは、注目すべき事実である。労働の分業化は、たんに技術上、経済上の必要から進んだのではなく、想像力の発達が生んだ観念の必要に迫られ、またそれによって支えられ、進められたものと解さなくてはならない。

g イフガオ族

ここでイフガオ族を取りあげた理由は、ほかでもない、彼らが畑作ではなく、水田による稲作民族だからである。おなじ農耕社会といっても焼畑方式と永久方式では、たんに農法が違うだけでなく、その社会構造、経済生活が異なり、したがって労働観念も変わってくることは、すでに述べたところから明らかであろう。このことはまた、陸田耕作と水田耕作という農法の相違の場合についても適用される。なぜなら水田は水利の便のよいところでなければ作ることができず、必然的に水田に使用できる土地は制限される。バトンガ族の場合のように、土地はありあまるほどある、というわけにはいかない。そのことは、土地に対する人口の集中度をかめると同時に、定着度もたかめる。砕いていうならば、限られた土地に多くの人間が縛りつけられる、という結果になる。同一の面積での水稻の収穫量の多いことが、集中された人口の食糧を確保するのだが、それは当然、労働の密度にはねかえってこざるをえない。

ものとなる。雑草の除去や稲の手入れなどの際、女は一団となつたがいに助け合い、それぞれの田を回っていく。「集団でやるのが一番よい。イフガオ族は協力して、今はこの田を、次はあの田をとっていく具合にやっていく。彼女たちは共同して働き、一緒に歌うことで、その苦痛を軽くする。稲の成育期に段丘地帯を通りすぎる者は、六人から五人の一人の女たちが、背中を守るために厚手の手織りの袖なし上着を着て、田んぼを回っているのを見るだろう」と、R・F・バートンは述べている。

共同労働や労働歌が、労働の苦痛を和げる試みとして行なわれている実例はここにもみられる。その意味では、それは人間の労働にとって、不可欠の型態ということができよう。

イフガオ族にとって、農業労働は尊いものとなっている。金持でも時間の許すかぎり、田に出て働くことをいとわれない。もともとこの場合の労働尊厳の観念は、のちの文明社会で確立されたようなイデオロギー的なものではなく、もっと生活の実情に根ざしたものである。つまり、山また山だが地味は肥えている土地から、生きていくに必要な食糧を削り取るようにして確保している彼らにとって、その労働がたんに苦しいだけでなく、大事な、尊いものとみえるのは当然であろう。彼らの労働の結晶であり、象徴でもある段丘式水田が、彼らの一番大事な財産と目されていることから、推察できることである。

たとえばありあまるほどの土地をもつバトンガ族の場合、畠作りは非常に苦しい労働である。また、焼畑で畠をこしらえるイロコイ族にしても、畠作りは非常に大事な仕事とされている。しかし、焼畑耕作の場合はもちろん、陸田耕作の場合でも、土地ではなくて、

畠そのものを一番大事とみなすような観念は見当らない。それはおそらく、水田ほど陸田の場合は労働が集約されず、また、一つの場所にて定着化されないからであろう。してみれば、労働を尊いものとみなす観念が、水田耕作と結びついてより一層強められたという仮説は、あながち牽強付会ではあるまい。

取入れの時、男女も、子供まで、およそ村で働ける者すべてが田に出ることは、他の未開諸民族とおなじである。だれもが自分の田で、短い手で一生懸命稲を刈る。金持の広い田では、金持の主人と使用人と、さらに臨時雇が一緒になって働くのだ。それは最も活気に満ちた時期であり、米から作られた酒がふんだんに振舞われ、ふだんはサツマイモを常食にしている貧乏人も、この時ばかりは毎日米の飯を食う。

このように米は最もうまく、したがって最も価値ある食物にされているが、しかしイフガオ族の主食ではない。主食はサツマイモで全食糧の四二%を占めている。米は三二%、その他、野菜、野生の豚、水牛、鹿、魚などがある。

サツマイモは、まえに述べたように、貧乏人の常食で、米作りほど肥沃な土地を必要とせず、また手間もかからない。雑草の生い茂っている丘を男が開墾し、サツマイモを植える。それからあとは女の仕事である。サツマイモ畠は、三〜四年たつと地力を失うので棄てられる。そのあと雑草が生い茂るようになると、別の家族がこの土地を開墾する。つまり、サツマイモ畠については、使用権に似た権利は認められても、土地そのものについての永久的な所有権はないようである。

取入れの終わる七月末から一〇〜十一月の初めにかけての休閑期

は、また狩猟のシーズンでもある。二人から一〇人ぐらいの男がチームをつくり、沢山の犬を連れて、森や草深い丘陵へ入っていく。

だがここまではこれまでみてきた他の未開諸民族の場合とそう違わぬが、獲物の分配はまことに特徴的である。バトンガ族のように、酋長が獲物のある部分を一人占めすることはあっても、獲物の分配は平等ないしは必要を原則とするのが通常であったが、イフガオ族の場合は、連れてきた犬の数に応じて分配され、最初に槍を投げた者にはボーナスがでるといふ仕組みになっている。このような分配方法が取られるようになった過程はよく分らないが、イフガオ族の間で盛んな商取引や、さらに高利貸制度の浸透に関連のあることはたしかであろう。

このような分配は、たんに狩猟ばかりではなく、農業労働にもみられる。イロコイ族などにあつて私的に蓄積された富は、気前のよさともてなしという二つの贈与行為を経済原則に取り入れることによつて、公けに還元されていたのだが、ここではまるで逆に、私的に蓄積された富は「資本」として、さらに私的な富を増殖する契機となつている。

これはいわば経済構造の根本的な転換である。そしてこれが、未開社会から文明社会への転換の、労働の代行とならぶもう一つの指標なのである。